

江原万里論

——憂国とキリスト教

松 井 慎 一 郎

はじめに

戦後、多くの国民が追求してきた「功利」的価値は、今日、社会の様々な面で歪みをもたらしているように思える。保守勢力が「戦後レジームからの脱却」として愛国心や道徳教育の強化などを主張するのも、そうした危機感に基づくものであろう。戦前・戦中、多くの国民はその内実を主体的に問う余裕のないまま「道義」的価値を押し付けられ、大きな犠牲を強いられたが、近い将来、再びその覆轍を踏む可能性もないわけではない。そうした点で、武士道的精神とキリスト教に基づく独特な道義観から戦争へと突き進む我が国の在り方を糺そうとした江原万里（一八九〇—一九三三）について考察することは時宜にかなうと考える。

全集が刊行されている（南原繁・矢内原伊作編『江原万里全集』全三卷（岩波書店、一九六九—七〇）。以下、『全集』と略記）にも拘わらず、江原に関する研究はほとんどない。鶴沼裕子「江原万里」（古川哲史・石田一良『日本思想史講座』第八卷、雄山閣、一九七七年）は、武士道的精神を鼓吹し、国家を超えた正義によって祖国を導こ

うとした特異な無教会派伝道者の存在を指摘している。斉藤七子「江原万里」(藤田若雄編『内村鑑三を継承した人々(下)』木鐸社、一九七七年)は、無教会派伝道者としてだけでなく、生い立ちや住友総本店時代など広範囲の言動を扱ったものであるが、天皇を否定することのできなかった江原の国体観を強調し、「江原はカルヴィニストというよりもアングリカンに近いということが出来よう」と指摘する。それに対して、新井明「江原万里」(無教会史研究会編『無教会史Ⅱ』新教出版社、一九九三年)は、国家以上の正義を説いた晩年の「鎌倉講演」を「ことによると天皇への諫止の意が込められていた可能性さえある」と評価し、戦時下における矢内原忠雄の活動への影響を示唆する。

いずれにしても、これまでのところ江原の全体像は明確になっていない。本稿の目的は、未公開の河合栄治郎宛江原万里書簡(一九九八年一月に河合の旧別荘にて著者が発見)や『全集』に収録されなかった経済学に関する論攷などを史料として、その全体像を解明することにある。

一 祖父・鞍懸寅二郎

江原はクリスチャンにも拘わらず一貫して武士道的精神を鼓吹し続けたが、それは彼の出自によるところが大きい。江原は一八九〇年八月十四日に、旧津山藩士江原晴次郎の長男として岡山県津山市に生まれた。美作国久米北条郡の領主・江原和泉守佐次を祖とする江原家は、豊臣政権崩壊後に没落、その後は津山藩に仕えて明治維新を迎えた(江原茂登「万里を憶う」『江原万里・祝 遺稿と回想』新教出版社、一九九四年、七五―七六頁)。五歳で父を亡くし、名門江原家の当主として期待された江原が、理想とした人物は、母方の祖父・鞍懸寅二郎であった。

江原は、晩年、自らが発行する雑誌『聖書之真理』に「祖父の書翰」と題して九回にわたって連載、幕末・維新时期に活躍した祖父の実像を見事に描き出している。当時、鞍懸には様々な誤解があつたが、江原は、遺された鞍懸の書簡を史料として実証的に祖父への誤解を打ち破ろうとしている。そこで強調されるのは、誠心誠意、大義の道を貫いた勤王の志士としての祖父の姿である。鞍懸は、茶坊主の出でありながらその才覚ゆえ若年にして赤穂藩勘定奉行に抜擢される。しかし、まもなく藩内の政争に巻き込まれ、藩から追放、その後は、江戸に出て儒学者・塩谷宕陰に入門、塩谷の推挙によつて津山藩に召し抱えられ藩儒となり、さらには国事幹旋掛となつて上洛、朝廷や攘夷派志士たちとの間で交渉役として活躍した。

江原は、塩谷宕陰から「赤穂藩に忠ならんとして、皇国の浩恩は如何に之を報いんとするか」と諭され、赤穂一藩へのこだわりをすて津山藩へ鞍替えして勤王の志士となつた祖父の転身劇を、「こゝに我国封建時代の最高の道徳が明治時代のそれへと変遷し、藩の上に日本国を発見した興味ある経路がある」（『全集』第二卷、六四三頁）と指摘する。また、西洋諸国の侵略を恐れ国家の統一をはかつた祖父が、命がけて藩主に長州征討の不可を嘆願したのを、「それは一意国を憂ひ、一身の安危の如きは毛頭も顧みる暇なく、只誠実その者が之を云はしめたのであることは疑ふことは出来ない」（同前、六五八頁）と解釈する。封建時代の武士でありながら藩を超越して一国という視点をすでに有していた祖父を高く評価するのである。

明治維新後、鞍懸は津山藩権大参事となり藩政の実権を握り、廃藩置県直前には民部省出仕を命じられ、新政府での活躍が期待された。しかし、一八七一年九月、津山に帰郷した折、何者かに襲撃され、非業の死を遂げた。母から祖父の死の際をたびたび聞いていた江原にとつて、彷徨した時、正しい道へと導いてくれたのは祖父の存在であつた。「中学時代乱暴でなまけ者で成績劣等であつた私がよくも不良少年に墮落せず成長したについては、祖

父の死に負ふところ甚だ多きを思ふのである。今猶私に若し身を捨てて国に尽くさうとする一片の赤心が存するならば、それは確に祖父の遺産である」(同前、六一九頁)と回想している。江原の生涯を通じて見られる憂国の至情は、祖父から受け継がれたものであった。

二 青春時代の懊悩と信仰

第一高等学校在学中、新渡戸稲造校長のもとキリスト教的な人格主義の感化を受けた江原は、一九一一年の東京帝國大学法科大学政治学科入学後、親友・高木八尺の導きにより内村鑑三のもとに通うことになる。当時、第一高等学校で新渡戸稲造の感化を受け、キリスト教信仰に関心を持つ学生たちが内村の自宅に集結し「柏会」を結成した。

江原は内村を生涯の師として慕い、内村もまた江原に大きな期待を寄せた(拙稿「河合榮治郎と柏会」、河合榮治郎研究会編『教養の思想』(社会思想社、二〇〇二年)参照)。この頃、内村が柏会のメンバーに伝えようとしたことは、一九一一年一〇月に行った内村の講演「デンマルク国の話」に明確に示されている。「デンマルク国の話」は、プロシヤとオーストリアに敗れて衰頹した北欧の小国デンマークが世界有数の富国として再生した過程を、ユグノー党(カルヴァン派)の信者であったダルガスの植林事業の叙述を中心に述べたものであった。「世に勝つの力、地を征服する力は矢張り信仰であります、フーゲノツト党の信仰は其一人を以て鋤と樅樹とを以てデンマルク国を救ひました」、「国家の大危険にして信仰を嘲けり、之を無用視するが如き事はありません」(『内村鑑三全集』第一八卷、岩波書店、一九八一年、三二四―三二五頁)というように、キリスト信仰が国家経営におよぼす影響の大きさを強調していた。後年、江原は、「(内村)先生の無教会主義とは実に国民的基督教主義、基督教的愛国主義と

も云ふべきものであつた。国民の興隆、国家の永久的存続の基礎は純福音である。此の福音は我国古来の善良なる風習、制度を毀つものでなく、反つて之を成就完成するものである。此の福音を受容れてこそ国粹は益々發揮するものである」(一) 内は著者注。『全集』第二卷、四三〇頁)と述べているが、内村を通じて、憂国の至情を全うさせるものこそキリスト教であると理解するに至つたのである。

江原にとつてキリスト教が信仰の域に達するようになったのは、自己の将来を意識しはじめてからである。同級生たちの多くは、秋の高等文官試験に備え、三年次終了後の夏休みにその準備にとりかかるが、試験そのものと官吏になることを好まない江原は、彼らと歩調を合わすことができず、一人将来の方向を決められないまま漠然たる不安をかかえていた。そんな折、江原家に突然のアクシデントが襲う。広島呉に嫁いだ妹の夫が盲腸炎を発症、発熱のため手術もできず、瀕死の状態となる(河合栄治郎宛松井欣子書簡 一九一四年七月四日付)。さらに、同じタイミングで、郷里の伯父が製材事業に失敗して財産を使い果たしたとの報を耳にする。とりあえず母とともに妹のもとに向かうことになつた江原の心中は、妹婿や伯父への心配、江原以上に動揺する老いたる母、その母をいまだ安心させられない自分への不甲斐なさが相俟つて「暗黒」に包まれた。この時、江原が親友の河合栄治郎に宛てた葉書には、「僕は明日遠き西の地に出発します。津山より更らに西です。急用です。暗黒です。然し患難にも欣喜を為します、少くとも為し度いものです」(一九一四年七月一日付)とある。父なきあと江原家当主としての期待と責任を一身に担い、祖父を目標としてきた江原には、自分の個人的な問題以上に家族や親族の行く末が案じられたのである。これまで経験しなかつた江原家の危機に直面するなかで、江原が唯一頼ることのできたのは、内村や学友たちを通じて知り得たキリストの神であつた。当時の日記には、「僕は実に神を恨み度くなる、然し／＼神は愛なりと信ず。信じなければ、どうしても居られない。若し神にして愛ならば、此患難にも忍び得る……然り、

我れは信ず、神は愛なりと。如何なる不幸あるも、我れは信ず、神は愛なりと。結局は愛、而して総てのもの一つとして失はるゝ事なしと信ず」(『全集』第二卷、九〇頁)との記述がある。

徒に自己の不遇を嘆くのではなく、救いを求めて神を信じ切った時、不思議にも事態は好転に向かう。妹婿の熱が下がり、手術ができるまでに回復した(河合栄治郎宛松井欣子書簡、一九一四年七月八日付)。神の加護を実感した江原は、衷心より神に感謝した。妹婿の病状回復を見届けた江原は、東京への帰路、故郷の津山に立ち寄り、五〇日余りを過ごすことになったが、その滞在中、国際情勢は大きく変化し、日本も巻き込まれることになった。すなわち、一か月前のセルビア人によるオーストラリア皇太子夫妻暗殺(サラエボ事件)を受けて、七月二八日、オーストリアがセルビアに宣戦布告、第一次世界大戦の幕が切つて落とされた。八月四日には、日本と同盟関係にあったイギリスがドイツに宣戦布告、同月二三日には、日英同盟の情誼とドイツ山東省權益奪取を目的に、日本はドイツに宣戦布告、世界大戦に参戦することになったのである。大戦乱に巻き込まれた祖国のゆくえを案じつつ、江原が緋いたのは、行李の中に唯一収めていた書『J.L.Motley, *The Rise of the Dutch Republic* (一八五六)であった。一五五四年から八四年におよぶオランダ人民によるスペインの圧制への反抗を熱情的な文章で綴った歴史叙述を通じて、江原は、日本と同様に国土の狭いオランダ共和国が海権を掌握して世界の覇者として君臨することのできた原因を「民に自由の精神存すればなり、為政家に敬虔にして高潔の士あればなり」と解釈、十六世紀のオランダの勃興に二十世紀の祖国日本を重ね合わせ、祖国が目指すべき方向について思いをめぐらせた。

噫十六世紀の和蘭国、第二十世紀の東亜の日本国、我が眼は今何を見んとするか。視よく、時の推移と天の休微とを。いと小なる我も亦立たざる可からず。百年か二百年か、はた数百年の後か、そは知る所にあらず。さ

れど遂に理想の国を実現しては止む可き。小なる端緒はやがて大なるものを作る。然り我れは勤めざる可からず。思ふに西洋の文運東洋に波及してより東洋の形勢一変しぬ。されど東西の融合は未だ成らざる也。かの西に徒らに黄禍の声高くして然かも何ぞ東に白禍の実の多きや。黄白人種の争それ回避し得可きや否や。世界の平和、それ何れの日か生ぜむ。いと高き天に栄光顕はれ、公道は水の如く大地に敷かれ、正義は万国を支配するの時何日か来らむ。然かも其顕はれて来る何処よりす可き。静かに思はずや斯国斯民、あゝ爾の天職は如何に遠く大なるかを（『全集』第二巻、九二頁）。

もともと憂国の至情を懐いていた江原は、神の存在を確信することで、世界に平和と正義をもたらすという壮大な天職を日本に求めることになったのである。

大学卒業後も進路を決めかねていた江原は、東京帝大の恩師である矢作栄蔵から住友総本店を紹介される。理事の湯川寛吉と総理事の鈴木馬佐也に面談するや、二人の誠実さに触れ、「実業家と云へば皆我利々々亡者であつて、自分の利益のためにはどんな悪事でも平気とする者である」（『全集』第三巻、一〇五頁）との偏見を見事に打ち砕かれ、実業家に「一片の誠実」なくしてその事業は永続しないと考えるに至つた（『全集』第一巻、九五頁）。住友幹部の誠実さに感化された江原は、住友を経営面のみならず道義という観点からも日本の模範的企業たらしめ、日本の実業界に寄与しようと考ええるに至つた。

僕の住友に入った時の最初の決心は何であつたかを偽らずに申しますが、之れは住友家を善くし様と云ふ事が第一ではありませんでした。僕は今と雖も尚住友家が僕の頭の中で主位を占めて居ません。住友家は従です、

主なるものは、日本国、我母国であります。そして現在の決心は此日本国のために計るにはこゝに立派な模範的なる実業家を作る事にある。故に住友を此模範的のものにし度い。彼れに模範的工場組織を完成せしめ以て目下の社会政策の解決者たらしめ度い。彼れに立派なる製品を安価に製造せしめ以て我国工業の地位を高め度い。彼れに実業家は正直を以て商略し為さしめて日本目下の実業界殊に大阪商人を覚醒せしめ度い。此等が我現在の希望で之れに対して努力せむとして居るのであります（河合栄治郎宛江原万里書簡、一九一五年十一月十七日付）。

三 道義と経済

一九一五年八月、住友総本店に入社した江原は、「一先づ実地を知らず為」という理由で経理課主計係に配属され、別所銅山や神戸製銅販売店などの情況、「銅の技術及市場」の調査を行った（河合栄治郎宛江原万里書簡、一九一五年八月九日付）。その後、一七年十月に庶務課秘書係に転属、二〇年一月には、大阪北港株式会社（住友商事の前身）設立創業のため出向した。大阪北港の設立が江原の住友在任中最も力を注いだ仕事であり、不眠不休の労作業であったため、後年の病の因を作ったといわれる。

江原が住友に在職していた六年間（一九一五〜二一年）は、短期間のうちに大戦景気と戦後恐慌を経験するといふ日本経済の変動期であったが、日本の産業界をリードする商社の一員として仕事を続けていくなかで、「我国に於ても貧富の懸隔が次第に甚しからんとし、然かも貧者も富者も共に大なる重荷を負ひて、之にあへぎつゝある態」を察知、「如何にして此世より貧乏を絶滅し得るか」という学問的欲求が湧き出て来た（『全集』第二卷、四頁）。

折しも、母校の東京帝大経済学部では親友の河合栄治郎が少壮助教授として活躍、人事においても大きな発言権を持ちはじめていた（「名誉教授座談会 東京大学経済学部における研究・教育体制の発展」『東京大学経済学部五十年史』東京大学出版会、一九七六年、六四七頁）。大学卒業後も江原と交流を続け、強い学問的欲求を知った河合は、江原を同僚に迎えることに成功、一九二一年一月、江原は晴れて東京帝大経済学部助教授に就任した。しかし、芦屋打出ノ浜を引き揚げて横浜本牧への引越荷造中に咯血、以後、肺病との闘いを強いられ、二七年六月に休職するまで満足に研究を進めることができなかつた。それでも、震災恐慌、金融恐慌、昭和恐慌と深刻な経済危機に直面するなかで、強い学問的意欲に駆られ、「富の増進」（『経済学論集』四卷二号、一九二五年十一月）、「自然と人生」（『経済学論集』四卷四号、二六年四月）、「交通の発達と社会理想」（『経済学論集』五卷三号、二七年三月）、『聖書の現代経済観』（独立堂書房、三一年）という研究成果を残した。

江原の在職期、東大経済学部は「マルクス主義の開花期」を迎えていた（大内兵衛『経済学五十年』上、東京大学出版会、一九五九年）。大内兵衛と舞出長五郎の二人の教授が留学先で本場のマルクス経済学を学んで帰国、さらには、ドイツのマルクス経済学者E・レーデラーが講師として赴任（二二年二月〜二五年三月）、マルクス主義が公然と研究されるようになっていた。そうしたなか、江原は、「一地方に於て如何に完全なる制度と雖も必ずしも他地方に於て適当なる制度なりと云ひ得ない」（「交通の発達と社会理想」一七三頁）、「如何なる資本主義国も口シヤ程の掠奪は為さない」（『全集』第一卷、八七頁）と、マルクス主義に対する批判的な姿勢を決してくずさなかつた。キリスト教徒である江原は、マーシャルやピグーなどの近代経済学の理論を援用して、資本主義経済体制そのものの変革ではなく、それを運用する人間の精神的変革に問題の解決を求めたのである。江原はマーシャルの『経済学原理』と聖書に基づき、富というものが人の物的欲望よりも犠牲的精神によって増進することを主張する。

よし天然の資源乏しくとも、国民の犠牲心強く活動力大なる時は其の前途を憂ふることを要しない。憂ふべきは国民の犠牲心が日に薄らぎゆき、それ以上に物的欲望の満足を得むとすることである。一見背理の如く思はるゝは、人類の物的幸福は之を求めざる処により多く増進すると云ふことである。伝道の書に、「汝のパンを水の上に投げよ」とある。経済的合理主義は其愚を笑ふ。されど曰く、「多くの日の後に再び之を得む」と。打算的ならざる努力の為めの努力慾、犠牲の為めの犠牲慾が盛になりて、各人は必要に応じて消費し、其能力に応じて充分活動することが出来る。こゝに人類の眞の自由は始めて存在する。自由の存する処人類の向上がある。人類の活動力は増進する。富も亦之に随ふ（「富の増進」八四頁）。

つまり、国民各人が犠牲的精神を發揮することで経済不況は乗り越えられるという極めて精神主義的な経済論を展開するのである。その犠牲的精神發揮の具体例として「土族の商法」をあげる。「土族の商法」とは、第一に「私利の代りに公共の利益を目的として産業に従事する事」、「儲かるか儲からぬかを考へる前に、何が社会のために必要であるかを考へること」、「昔の武士が身命を献げて君国のために尽くしたやうに献身的に産業に従事することである」。第二に「昔の武士が其の武技の優秀を誇りし如く、各自其の製品の優秀を誇りとする事である」。第三に「昔の武士が敵と戦ふに当り、名誉を重じ、卑怯にも敵の寝首を搔く如きことなく、必らず正々堂々と名のりを挙げて戦つたやうに、各事業家が堂々と競争をなし、又或時は公明に協調し、又弱きは之れを扶け導き、時には自己を犠牲として他を生かす事である」という（『全集』第一巻、八九頁）。そして、現代社会において「土族の商法」が実行不可能な理由を信仰の欠如に求め、「キリストの十字架に神の永遠の義を認め、キリストに頼つて立つか、各人自己の胃の腑に仕へて之れを神とするか」と現代人に迫る（同前、九一頁）。経済問題の解決という学問的課題を

追求していくなかで、江原は、武士道的精神とキリスト信仰という原点に改めて向き合うことになったのである。病魔は確実に江原の体を蝕み、教壇に立つことを不可能にした。江原の進退について、親友の河合と師の内村は会見し、「すべての情実や利益問題を離れ、日本武士の取るべき途を取るが宜しからうと云ふ事」で意見の一致を見た（『内村鑑三全集』第三九卷、二七三頁）。結局、江原はこれを受け容れ、その短い研究生活にピリオドを打ったのである。

四 祖国の危機にさいして

休職後の江原は、病をかかえながらも、二七年十一月には月刊個人雑誌『思想と生活』を創刊、二九年四月には鎌倉の自宅にて集会や日曜学校を開始する（鎌倉聖書塾）など無教会派伝道者として活動することとなった。三〇年三月には信仰の師・内村鑑三が、同年七月には先輩の藤井武が死去し、周囲から無教会派伝道師としての役割をますます期待されることとなった。三一年一月に『思想と生活』から改題した『聖書之真理』では、内村の死去によって行き場を失った藤本武平二や斎藤宗次郎ら柏木教友会の人々に発表の場を提供、毎号の頁数も二四頁から三二頁に拡張し、発行部数も六千部を数えるに至った。

ロンドン海軍軍縮会議、満洲事変勃発、国際連盟脱退と相次ぐ対外的危機に襲われるなか、江原の憂国の至情は頂点を迎え、衰弱した体を引きずりながら、命がけで神の福音を説くことになった。満洲事変に対しては、次のように痛烈に批判する。

我が国に於ける本年の最大事件は、云ふ迄もなく満洲事変である。早晩来るべしと予期された事が不幸なる事実として出現した。支那全土動乱の徴あり、禍乱は東洋より世界に及ぼんとする。

此の事変に於て我国は世界の輿論の反対を受けた。されど外よりの非難攻撃は少しも恐るゝに足らない。恐しいことは我等果して神の前に義しくあるかである。若し義たらんか国滅ぶるも亦興る。義ならざらんか興るも滅ぶ。権益の擁護、生命線の死守、或は又赤化防止は以て神の前に義たらしめない(『全集』第三卷、一一四頁)。

江原の命を縮めることになつた最大の原因であるとともに伝道者としての声名を最も高めたのは、三三年四月から七月にかけて、鎌倉市内に会場を借り、三谷隆正、山田幸二郎、矢内原忠雄の応援を得て日曜毎に行つたキリスト教講演会、所謂「鎌倉講演」であつた。

ここで江原は、「万世一系の皇統を戴き、いまだ嘗て何処の国にも隷属した事のない事、此は我が国体の精華であると思ひます。併し乍ら唯之を以て我が国の行動は凡て正義であるとして外国に主張し、早晩外国人が之を承認するであらうと考へる事は出来ません」(『全集』第一卷、五七六頁)、「唯領土の拡張、日本民族の経済的発展のみを目的とした時は、今支那が此の地(満洲)を失つたやうに遠からず之を失ふであらうと思ひます。そのみでなく、何日かは朝鮮も台湾も失ふであります。『日本の正当の権益を害した怪しからぬ支那の頭を殴るのが何故悪い』と云ふ正義では、日本は『満洲を救ひ、極東を救ひ、世界を救ふ』ことは出来ません」(同前、五八二頁)と、日本の国家主義・帝國主義政策に対して容赦のない批判を展開した。そして、その鋭い批判は皇国史観にも向けられた。「承久の乱は鎌倉幕府の汚点ではなく、非は京都にありました。若し此の様な政治が度々行はれたならば、我が国民は今のやうに皇室を尊敬せず、我が国の主権は他に移つてゐたかも知れません。然るに実は鎌倉幕府ありし

故に、殊に泰時と其の孫時頼の仁政があつた故に、皇室は安泰を得、日本国民は本当の政治の何たるかを学び、且つ此の時以来始めて、我が国の精華である武士道が起つたのであります」（同前、五八六頁）と、天皇親政を否定して武家政権を高く評価した。それは、当時、逆臣の汚名を一身に浴びていた足利尊氏まで評価するというものであり、まさに「我が在来の国体観念への原子爆弾投下」（小田丙午郎「江原万里先生をしのぶ」『江原万里・祝遺稿と回想』一八三頁）とのちにいわれるほど徹底したものであつた。

江原をしてこのように身体的にも社会的にもきわどい戦いを展開することを可能にさせたのは何であろうか。江原は、『聖書之真理』第四七号（三一年九月）から第六一号（三二年十月）まで「エレミヤ記の研究」を連載している（三二年十二月に『宗教と国家―エレミヤ記の研究』と題して岩波書店から刊行）ように、古代イスラエルの預言者エレミヤの生涯に注目していた。それは、エレミヤが生きた古代イスラエルの国民と、現状の日本国民がオーバラップして見えたからである。不義を重ね未曾有の国際的危機を迎えている祖国日本は、古代イスラエルと同様、滅亡に向かっているものと考えられた。

今や国は独立を失ひ、アツシリアに代つてエジプトに隷属せしめられた。悪王上に在りて不義不公平を行ひ、民は重課に苦しんだ。此の時に当り、無智なる民衆の心に倚り頼むものは最早何物もない。只此の神殿の内に奉祀せられた神だけである。彼等は霊と真理とを以て拝すべき真の神を知らない。只神殿に集り、そこに奉祀されてある神を祀る事に由つて、神の守護を受け、国は安泰にして民に幸福があると信じた。宛かも我国民中無智なる多くの者が、日本は神国にして、伊勢の大神宮ある限りは、而して国民皆之れを国体の淵源として仰ぐ限りは、仮令姦淫、賄賂、詐欺、掠奪が横行しようとも、我国は安らげ、若し外国が攻め来る時には嘗て

十方の蒙古の兵船を吹き払うて悉く之を海底の藻屑となしたやうに、神は此の国を鎮護し給ふであらうと信ずるのと相似てゐる（『全集』第一卷、三二七―三二八頁）。

真に国を愛し神を拝しながら国から迫害され神から罰せられたエレミヤの悲劇的生涯を通じて、江原が確認したのは、「直に神に選ばれた義人が同胞に代つて苦しむことによつて、人々は救はれる」という「宗教上の大真理」であつた（『全集』第一卷、二二四頁）。祖国の不義によつて招いた未曾有の危機に直面して、江原は、エレミヤのように、自らが不義なる国に代わつてその罪を一身に受けて苦しむこと（「代贖」）で、愛する祖国を救済しようとしたと考えられる。妻・祝が死の淵で苦しむ江原に「何とかして自分が代つて苦しみ度い」というと、江原は「おれは日本の皆のために苦しむんだ」とうめいたという（金沢常雄「義人の死」『江原萬里・祝 遺稿と回想』一二六頁）。

おわりに

江原と同世代のクリスチャンである高倉徳太郎（一八八五―一九三四）は、「自我の問題」を解決するといふ個人的内面的な動機からキリスト教に入信したと回想している（『高倉全集』第六卷、高倉全集刊行会、一九三六年、四頁）。これまで論じてきたように、江原の場合、自我というより国家ないしは社会への関心から思想・信仰活動が展開されていた。これは、江原に限らず、新渡戸稲造と内村鑑三から思想的信仰的影響を受けたクリスチャンに共通する特質であるが、それに関する詳細な考察はまたの機会に譲りたい。

(二〇一六年十月十九日、「キリスト教と諸学の会」発表)

